

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2016年12月3日

文責：JUN

## 音読をすれば読みは深まるの？

音読をするだけで、文学を読む味わいは深くなるのでしょうか。もしそうだとしたら、どういう音読をすればよいのでしょうか。

### 1 文学の授業における「音読」の大切さ

文学の読みに正解はありません。文学は音楽や美術と同じ芸術です。音楽や美術の鑑賞に、こういうふうを感じなければいけないという決まったものがないことはだれもが知っている通りです。にもかかわらず、文学の授業になると、この作品のここはこういうふうを読むのだと教えようとしがちです。文学が「国語」という教科に収められているため、「教える」という指導意識がはたらくからでしょう。文学にここはこう読まなければいけないという厳密さはないのです。ただし、それはどう読んでもよいということではありません。

文学は言葉で表現された芸術作品です。文学の場合、鑑賞することは「読む」という行為になります。作品を読むには現象的には文字を読みます。しかし、一つひとつの文字を別々に区切って読んでいても作品世界は浮かびあがってきません。ということは、文字を読むというより、文字の連なりである「言葉」を読まなければいけないのです。もちろん、その言葉が連なって「文」になり「文章」になるのですが、少なくとも「読む」行為の最小の単位は「言葉」です。

言葉を読むのが文学の鑑賞ですから、言葉にしっかり触れない鑑賞はあり得ません。しっかり読みもしないで作品について語ることはできません。さっと読んだだけで分かったような気になる人がいます。そういう人は、言葉に十分触れず、言葉に出あわず、言葉で描かれている状況にも出あっていないのです。文学の鑑賞において、「言葉に触れる」「言葉に出会う」ということは必須のことです。どう読んでもよいということはないのです。つまり、言葉に触れない読み方ではまっとうに文学を鑑賞したとは言えないのです。ですから、学校の授業において、好きなように読ませておいてよいということは決してありません。教えない、けれど、自由に読ませておいてもいけない、言葉に触れるように読ませなければいけない、それが文学の授業の鉄則です。

音読が大切な根拠はここにあります。声に出して読むとき、目は言葉に注がれ、その言葉を音声化するとき、言葉が体の中に入ってきます。言葉がイメージになり、頭の中で映像化されたりそこで形づくられる事柄に心が反応したりします。それは、実際には起こっていない状況があたかも目の前で繰り広げられているかのように浮かべるのですから、言葉をもとにした「想像」だと言えます。頭の中で文学

は人間の「想像力」によって鑑賞されるのです。その「想像力」のみなもとは「言葉」です。その「言葉」との出あいを確かなものにするのが「音読」なのです。

もちろん「黙読」でもいいでしょう。本の好きな人が電車の中で読書をしているとき音読している人はいません。黙読です。しかし、学校における文学の授業では「音読」のほうが重要です。それは、肉声で読み表すことに意味があるからです。音声にすることによって、黙読するときよりも濃密に「ああ、ここはこういう状況なのだ」「この人物はこういう心境になっているのか」と気づくことができるからです。言葉から受け取るという第一の「想像」に加えて、受け取ったものを自分の声で表すという第二の「想像」がなされるからです。

もう一つ、文学の授業においては音読するほうがよいという理由があります。それは、「学び合い」ができるからです。一人だけで読むのであれば黙読でもよいのです。けれども、仲間とともに共通の作品を読む授業においては、仲間の音読を「聴く」ことから読みが深まります。ここに文学を授業する意味があります。

文学の読みに正解はない、と述べました。それなら、授業をする必要がないのではないかということになります。一人で読ませればよいのではないかということになります。しかしわたしは、仲間とともに読むことに意味があると思っています。それは、一つの解釈を探し出すためではありません。すべての子どもが言葉に触れて読めるようになるためです。この後、このことについて詳しく述べますが、とにかく、音読は、自分の読みを深めるうえでなくてはならないものであるとともに、他者と学び合うためにもなくてはならないものなのです。

## 2 音読しているだけでいいの？

そこで考えなければいけないのは、繰り返し音読さえしていれば、子どもの読みは深くなるのだろうか、読む喜びは高まるのだろうかということです。日本の国語教育で歴史的に脈々と継承されてきた読み方は、音読をすることよりも解釈することでした。その解釈はよくないことなのか、極端に言えばただ何度も音読をすればよいのかということです。

言葉からどういう想像をしたか、つまり、言葉と言葉の連なりからどういう状況が浮かび上げることができたかは極めて大切だと私は考えていると述べました。それはわたしなりに言えば「読み描く」という読み方です。わたしは作品を読んでも描けなかったら作品の世界に出あっているとは言えないと考えています。

実は「解釈する」ということも、文学を読む基本である「読み描き」をするためなのではなかったのでしょうか。言葉いじりをするためでも、自分本位な「勝手な解釈」をするためでも、抽象的な「主題」を言い当てるためでもなかったはずです。たとえば、「ごんぎつね」で、ごんが「おれと同じひとりぼっちの兵十か」と思うところがありますが、その文末の「か」にはどんな思いが込められているのかと考えることも「解釈」でしょう。それがすべてよくないとは言えません。しかし、往々にして、「おれと同じ」と感じるごんの心根に近づくのではなく、ああだこうだという議論をする面白さにすり替わってしまっていたのではないのでしょうか。

こういう時、必要なのは音読です。「おれと同じひとりぼっちの兵十か」と、ごんになって読んでみる

ことです。ごんの状況に自分を置いてつぶやいてみることです。音読をして「か」に自分の想いを込めてみることです。それをしないで、ただああだこうだと「話し合った」としたら、それは議論を楽しんでいるだけで作品の味わいを深めたり、言葉への触れ方を深めたりしているわけではないのです。そういう「解釈」の授業が多かったのではないのでしょうか。

解釈する授業は「話し合い」の授業になりがちです。そして、子どもが自分の読みを次々と語る授業がよい授業だと評価されます。そうなればなるほど、音読は遠ざけられます。音読が遠ざけられるということは、作品の味わいを失うことになります。「ごんぎつね」の6の場面は、ごんが兵十に鉄砲で撃たれる場面ですが、その場面を想像し、本当に味わっていたら、ああだこうだと活発に発言し合う授業になるはずがありません。それは、「話し合い」を進めれば進めるほど、作品の味わいから遠ざかる典型的な例だと言えます。

一方、音読をたくさんさせている授業は、どんな授業であっても作品の味わいを深めているかというとなんな単純なものではないでしょう。ただ言われるままに、音声化しているだけということもあります。だとしたら、そこに、どういうことが必要なののでしょうか。何が必要ないといけないのでしょうか。

もっとも大切なことは、音読をするときに、「読み描こう」「言葉と言葉の連なりを味わおう」という意識を抱いて読んでいることです。そこが子どもの中にしっかり降りていないと、いくら音読してもそれは言われるままに文字を追っているだけです。ある学校の授業で、授業開始から20分、ひたすら子どもが音読していたそうですが、そのときの子どもがどちらの状況だったかによってそれがよいのかどうかが決まるように思います。

次に、「読み描こう」「言葉と言葉の連なりを味わおう」という意識がしっかり子どもにできてきたとしましょう。そうなったら、ただ音読させればよいのでしょうか。

そこで考えなければいけないのは、一人ひとりの「言葉への触れ方」です。みんな同じ解釈にできるかということではありません。そうではなく、音読をしながら、言葉や言葉の連なりから作品の状況を描いたり、描いたものに心を動かしたりできているかということです。

わたしは、自分の体験から、それは学ばなければ身につかなかったと思っています。もちろん、自分に何度も文章を読むということを怠ってはなりません。けれども、見れども見えず、ということがあります。わたしは、若い頃から、見えない自分に対して、みえるようになりたいと願いました。そして尊敬する人から学びました。わたしの文学の味わい方やそのための感覚は、たくさん読んだことと、何人もの人の読みから学んだことによって形成されてきたのです。だから、子どもも、仲間から学ばなければいけないと思っています。つまり、ただ、毎日、音読を繰り返させているだけでよいとは思わないのです。文学の授業における学び、それは、解釈を分からせるとか、こう読むのだと理解させるということではなく、言葉への触れ方を磨くということです。それは、ただ音読をしているだけでできるほど簡単なことではないのです。

話は逸れますが、ここで、文学の授業におけるグループの学びについて述べておきます。

文学の授業におけるグループの学びは、他の教科とは趣が異なります。正解がないからです。何かをわかるために行うということではないからです。疑問を解決するために行うということではないからです。繰り返しますが、一人ひとりが自らの言葉への触れ方を磨くためなのです。

大切なのは、他者の言葉への触れ方、他者の読み描き方に出あうということです。一人黙々と読んでいだけでは、自分の感じ方しかありません。けれども、他者の読みを聴くことによって、自分にはないものがあることに気づきます。そして、自分の読みとのすり合わせができます。そこから、「味わい」の深まりをつくり出すことができます。そこにグループの学びの大きな価値があります。ですから、教師は、「みんなで一つの科読み方を見つけるためじゃないよ。自分の読みを生み出すことが何より大切なこと、そのために仲間の読みから学ぶようにする」ということを徹底して子どもに伝えておくべきです。

さて、音読に戻りましょう。わたしの言いたいことはもうおわかりでしょう。音読は必須です。欠くことはできません。その一方、子どもたちの言葉への感覚を磨かなければなりません。そのためには仲間から他者から学ぶことが必須です。この二つの必須をどう実現するかが極めて大切なことなのです。それはどうすればできるのでしょうか。

ひたすら音読するということも必要です。何度も言葉に出会うことによって磨かれていくからです。もちろん、そこには「読み描く」という目的意識がなんとしても欠かせません。

けれども、自分で読んでいるだけでは限界があります。そこで仲間との学び合いの場を設けるのです。仲間の音読を聴く場がその一つです。そのためには、ただきいているだけではなく、読み手が描いている状況を想像するように聴くようにしなければなりません。仲間の音読を聴くことによって、自分で音読しているときには気づけなかったことに気づける、そういう聴き方をさせるのです。

音読をして浮かび上がったことを語り、それを聴くという場も大切です。言っておきますが、十分音読をしないで高尚な解釈をさせるためではありません。音読をして心の中に生まれたものを語り、そこから一人ひとりが自分の読みを磨いていくためです。そのとき大切なことは、そういう読みに触れたら、何かに気づいたり、おやっと思ったりしたら、語りの後すぐまた音読をするということです。音読に戻すことで、いま、耳にしたことと言葉とのつながりが生まれるからです。言葉に触れる、その鉄則を具現化するのが音読だからです。

ただし、語ることが一人ひとりの言葉との触れ方の深まりになるかどうかの鍵は、語りを「従」にしてそこから行う音読を「主」にするぐらいの考え方をしているかどうかで決まります。一人ひとりが自分の読みを「音読」によって探り、「音読」によって表し、「音読」によって味わい、「音読」によって言葉や作品への触れ方を磨いていく、そう考えればきっと実現するでしょう。

わたしがもっとも憧れるのは、音読をしながら、音読を聴き合いながら、その合間に何人かの子どもが気づきを語り、それを学び合い、また音読に戻っていく読み方です。こういう読み方をすれば、子どもの目がどんどん深くなり、一人ひとりの作品への触れ方が満ちていくでしょう。気づきの聴き合いから生まれたものが子どもの読み声に表れ、それを聴いた子どもたちに芳醇な味わいが生まれてくるでしょう。わたしが憧れるのはそういう授業です。

このような授業は、きっと、トータルすれば、45分の授業時間の少なくとも半分は音読になるでしょう。そして、子どもの語りが見事に音読に反映されていくでしょう。

ただ音読しているだけ授業ではそれは実現できません。解釈を話し合わせる授業ではそれ以上に実現できません。子ども一人ひとりが文学を読む「味」を堪能できる授業、「味」を学べる授業、そして、文学を読む感性が磨かれていく授業、それを「音読」を中心に置くことで実現したいものです。